

# 米朝首脳会談 後の東アジア

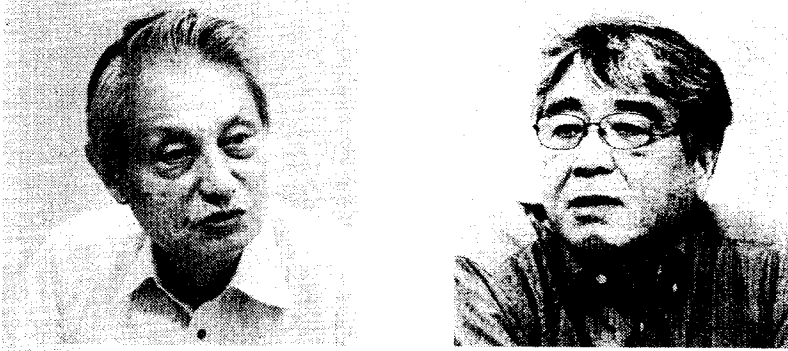
## 非核化・平和構築の行方は

対談

平井久志

李鍾元

×



ひらい・ひさし  
一九五二年生まれ。ジャーナリスト。共同通信社客員論説委員。二〇〇二年、瀋陽事件報道で新聞協会賞、北朝鮮経済改革などの報道でポーン・上田賞受賞。著書に『北朝鮮の指導体制と後継——金正日から金正恩へ』（岩波現代文庫）など。

リー・ジョンウオン  
一九五三年生まれ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。国際政治・東アジア国際関係論。著書に『戦後日韓関係史』『東アジア和解への道——歴史問題から地域安全保障へ』（ともに共編著）など。

世界 SEKAI 2018.8

### 米朝共同声明をどう読むか

平井 六月一二日に歴史的な米朝首脳会談が行なわれました。しかし、それに対する日本のメディアの反応を見ると、特に非核化をめぐる、共同声明で「完全な非核化の努力」という四月二七日の南北首脳会談で確認された文言にほぼ近いレベルにとどまったことと、非核化の具体的な内容が含まれなかったことに対する失望感が大きく取り上げられているように見えます。

私はむしろ、この共同声明の中でいちばん意味があるのは以下の文言だと思います。「新たな米朝関係の確立が、朝鮮半島と世界の平和と繁栄に寄与すると確信し、相互の信頼醸成によって朝鮮半島の非核化を促進できることを認識し、トランプ大統領と金委員長は次のことを言明する」。つまり、両国が七〇年近く続いた敵対関係から離脱して新しい関係に向かうことを確認したのが、この声明の大きな意味であり、そのことはもつと大きく評価していいと思います。

金正恩委員長が平壤から空路シンガポールに向かったのは六月一〇日ですが、興味深いのは、翌一日の「労働新聞」に、「全世界の非常な関心と期待の中で史上初めて行なわれる朝米首脳会談では、変わった時代の要求に応じて新しい朝米関係を樹立して、朝鮮半島の恒久的で強固な平和体制を構築する問題、朝鮮半島の非核化を実現する問題をはじめ、お